

## 「未来記」俳諧新論

藤田真一

### はじめに

詩歌の歴史のなかで、「未来」という語は心して用いないといかないようだ。

特段の注意もせずに、将来、今後、これから、などの意で何気なく口にすることが多いだろう。まぎらわしいのは、「将来」との違いである。「将来」はまさに来らんとする時代、「未来」はいまだ来らざる世、といったふうに、逆方向からの意味の汲み上げに差異を言いたてることは可能だが、英語でいえば、*future* の語に置きかえるだけのことである。語義を単純化すれば、語彙の諸相はみえなくなるばかりである。だが、そこへ語史をからめると、さまざまな相貌が浮かび上がってくる。

とりわけ気を引かれるのは、「未来」のほうである。この語

は、仏教の教えにおいては、人間の前世・現世・後世の三世をいう、過去・現在・未来のそのひとつである。前世の因縁をこの世で晴らし、願わくは来世で幸せのくにに生れかわる功德をもたらすことである。あの世で救われることこそが、人間たる究極の願いとされる。となると、「未来」という語は、とても疎かに扱えるものではない。

仏教の教えを引き合いに出すまでもなく、ごくふつうの一個の人間としてだけでも、これから先どうして生きて行けるかは、だれも知りようがない。それが未来である。わからないということは、また不安をかもすたねにもなる。未知であることこそが、生きて行くうえで最大の懼れの要因となる。「未来」がたんなる将来、今後おこり得べきありさまというにとどまらず、ときには悦びや憧れに満ちた様相をもたらす反面、またときに

は憂えや絶望をかもす屈託の世界を招くものともなる。

「未来」の一語が、こころや思想に多面的な色取りをもたらしただけでなく、人間の生み出す文化や文学にまで、種々多端の合いを染めつけるとなると、あてのない茫漠たる話柄とばかり封じ込めておくこともなるまい。ことに、そこに藤原定家や芭蕉といった歌俳の主役がかかわり、日本の詩歌の大動脈に由縁なしとせずとなると、むしろ積極的にこの問題を迎えに赴くことも必要なかもしれない。ことは芬芬錯落たるもので、単純明快な結論を導くことにはならない見通しを抱きつつ、あえて火中の栗を拾う気概をはじめにうち出しておくこととする。

## 一 擬定家作「未来記」

藤原定家作とされる「未来記」は、さまざまな形態、もしくは書名で追跡することを要する。手始めに『国書総目録』『古典籍総合目録』をたどってみると、「未来記」単独の書名では幸若舞の曲名であるものの、歌書としての書名は見られない。歌書としては、「未来記雨中吟」の名称で立項されるばかりである。むしろ、「三部抄」「和歌七部之抄」といった叢書中の一部として拾うことはたやすい。これらの書目を右の目録で探つて

みると、写本・刊本あわせてたどるのがつらく感じられほどの数にのぼる。よほど普及・流布したものと悟るべきだろう。

諸本校勘などという高尚緻密な作業はさておき、ひと通りの内容をうかがおうとすれば、いったいどの書に就くのが適当なのか、門外漢からすると途方に暮れるばかりとなる。写本の弁別などとてもおぼつかないし、善本を選別するなどというのは、所詮向う見ずなしわざにちがいない。そこで、もつとも手近なところで、関西大学図書館に所蔵される江戸版本の『和哥未来記』（慶安三年刊）をテキストとして、吟味・詮索を進めることとする。<sup>(1)</sup>

内題は「未来記」とあり、その直下に「前和哥得業生柿本貫躬」という署名があるが、思い当たるふしのない人名である。とはいえ、どこかひつかかりのある文字面が並んでいるようにもみえる。案ずるに、「柿本貫躬」とは、柿本人麻呂と紀貫之、それに凡河内躬恒、これら三歌人の名前がまるでハイブリッドのように組み合わせられた命名であるかにみえる。ともかく序文を見ながら、本書の要点に近づいてみたい。

此書を未来記と号する事は、後生こうせいの輩、哥を詠ずる事深き姿のたけ高く優にして、たゞしく又あはれふかささまを思ひ、ねがはずして、たゞ新しくよみ出さんとする故に、や、

もすれば入はがに事過<sup>こと</sup>、又は心詞とゞかずして、正風の事は云に及ばず、変風の隠までも及ばず、つゝかぬ事を珍しき詞として、心得ぬ事をふかく理<sup>ことば</sup>がほにいひ、又近代の秀哥どもをぬすみ取て、それをめづらしき様にしいだしたる、おもふ心をふかくかなしびて、京極黄門定家卿、後学末生<sup>まつしやう</sup>の心をかゝみて、如此よみ出ていましめにし給と也。仍此作者柿本貫躬と書る事、可<sup>レ</sup>受<sup>ク</sup>三<sup>二</sup>口<sup>一</sup>伝<sup>ヲ</sup>一者也。

前半には全文句点をうつ箇所が見当たらず、これで一文と見られる。そこにはまず、「未来記」の書名に関わつて、後学の輩がすぐれた和歌を詠むことを願ひながら、願ひとは逆に、詠みぶりがあらぬ方向におれてゆくことを嘆くことになるとのべる。とりあえず、ここでは三点について注意を留めておきたい。第一、新しい詠みぶりを意識しながら、結果、技巧に走つて意味不明の歌となる。第二、無理やり珍しい表現をとり、理解不能のことをわかつたような風をする。第三、本歌取りの域を越えて、有名和歌の盗み取りして、いかにも珍しいようにいう。

そのような和歌になることを悲しんだ人物がいたという。なんとそれが京極黄門こと、藤原定家だったというのだ。その定家が悪歌の見本をしめしながら、「いましめ」のためになしたことなのだという。しかも、定家本人名ではなく、「柿本貫躬」と

いう見なれない名前のもとにおこなつた。ただしその内実については、「口伝」を受けるべき事柄だと語っている。これを逆にいうと、明らかにみせることはできないということでもある。ところが、序文直後におかれた釈義には、かなり詳細な説明（口伝？）が添えられている。開口一番、「此各作者、つくり名也」ときて、いきなり手の内をさらけ出してみせた感がある。そのあとで、柿本貫躬のことを以下のように紹介している。

貫躬は貫之の風かと思へば、又躬恒が風也。又人丸の風もあり。此心を以て作者をつくらるゝ也。儒者に比して、和哥得業生と書なり。

「柿本貫躬」という名を仮託したのは、古代の名歌人の歌風をないまぜにするねらいからだとある。さらに「得業生」についても、古代の文章・明法・算道・明経などといった儒者に擬えたものであつて、「和歌得業生」という名称は本来ないものなのなのだともいう。これも「定家」が実態を隠匿するためにした作り事なのかと、疑わしくもなってくる。本物の定家の自作か偽作かの問題はしばらく先送りして、つぎに本書に揚げられた悪しき見本とされる和歌例をみておくことにする。

本書には、全五十首の作例が掲げられる。内訳は、春・夏・秋・冬の四季の各十首に加えて、恋の歌十首、計五十首となつ

ている。このなから特徴的とおもわれる和歌数首と、必要に応じてその論評を瞥見することとする。冒頭、春第一首はこの歌に始まる。

年の内に春はきにけり一とせに二たび霞む四方の山のは

これを目にしただしもが、ただちに古今集の巻頭歌を思い浮かべるだろう。なんと上の句はほぼ完全に一致する。和歌のありようとして、懸念をいだくのも当然である。関大本『和歌未来記』は、つぎのようなコメントをくだしている。

此哥は古今の巻頭なる上、詠哥の大概にも雖<sup>モ</sup>二句「不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>詠<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>」といへる詞也。

前半はまず、当然ながら、古今巻頭歌に重複することを指摘する。後半では、『詠哥大概』にも指摘があるという。そこで『詠哥大概』をひもといてみる。そこには本歌どりの心得がのべられ、古歌をどの程度取り入れることが許されるかが説かれている。一般的には二句を越えることも可能だとする一方、二句すら取つてはならぬ古歌が四首しめされる。そのなかに、業平の「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」などの名歌とともに、まさに「年の内に」の歌が掲げられているのだ。その心得が、「如<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>類、雖<sup>モ</sup>二句「更<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>詠<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>」という戒めとして提示されている。『和歌未来記』では、この指摘を引き合いに出した

うえで、上の句のほとんどが古今歌のままであるとして、「狼藉の至極也」と弾劾する。この冒頭の一事は、「未来記」全体の姿勢をあらわしているとみてまちがいない。

過剰な本歌取りとしては、「時鳥鳴やさ月のよの程をあかしや鐘のこゑもほのく」（夏）や、「風わたる声の枯葉にとだゆෙනにはの事の夢の浮橋」（冬）などの和歌にもみられる。前者は、「時鳥鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな」（古今集）の上二句にかかる本歌取りであるとともに、「ほのほのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」（同）をもかすめた歌い口になっている。かたや後者は、「津の国の難波の春は夢なれや声の枯葉に風わたるなり」（新古今集）と、「春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るる横雲の空」（同）の二歌によっている。いかにもあざとい手法である。と同時に、いずれも名歌とされる和歌ばかりから剽<sup>ひ</sup>窃<sup>し</sup>しているところに、あえて極端な悪例を並べて戒めにせんとする意図が見てとれる。

またこんな歌はいかがか。

とまれかし行方<sup>ゆくかた</sup>しらぬ蚊遣火の煙ぞ空にみちの旅人

『和歌未来記』は、「旅人のさま、さらによりつかず、けぶりぞ空にみちのなどつきたる、又よろしからず」と評している。端的に言って、「空に満ちる」と「道の旅人」の掛詞がよくない

というのだ。あるいは、「置そむるまがきの菊のかことだになかば、霜の下染ぞうき」(秋)や、「夕暮はつらき嵐のうつの山おもひをたれにつたの下道」(恋)なども、同様の無理な掛詞になっていて、意味不明だと指摘する。また、「さし暮るすざき<sup>3</sup>にたてるさきたまの津にをる舟も氷閉つ、」(冬)の和歌では、二句目の「すざき」について、歌枕「洲崎」が「鷺」に「取りなし」として歌われているのか、と疑問を呈している。そして、この和歌を掲げたのは、「いひにくき秀句を好む事をいましめんが為」であるとのべる。秀句とはここでは、地口・口合のたぐいで、洒落のめした表現をいう。掛詞にもなっていないというのだ。

このように、ここに掲出の五十首は、いずれもなにがしかの欠陥ないし問題を抱えているとされる作ばかりである。『和哥未来記』の評言中の語句を列挙すると、「入ほか」「無心所着」「心たらず」「詞ことに見苦し」「取そこなひ」などと、悪評語のオンパレードとなる。まさにそれこそが、本書成立の根幹なのである。手本とすべきすばらしい和歌群では決してない。序文にいう、「京極黄門定家卿、後学末生の心をかゝみて、如此よみ出ていましめにし給」とは、まさにそのことをいつている。再説になるが、定家が和歌の道のすたれた後世に生まれた者たちを導くために、あえてこのような愚作・問題作をよんでみせたの

だとする。和歌をよりよく詠じるために、意識して悪見本を見せて、訓戒を垂れたということになる。まさに毒を以て毒を制すの手法といえよう。

## 二 「未来記」の変位

『未来記』は藤原定家が「柿本貫躬」の名を借りて述作したものであるというが、現在においては、定家仮託書、あるいは定家偽書という説が行き渡っている。学問的論議としては、それを否定すべき謂われはまったくない。だが江戸時代は、右の版本がまさにそうであったように、疑いなき定家歌論書と信じられていた。たとえば、貞徳の『戴恩記』には、「定家卿邪正を糺<sup>ただ</sup>されずんば、古今集も徒<sup>いた</sup>ならん。殊更百人一首・秀歌大略・詠歌大概・雨中吟・未来記の書を著して、道に功をつみ、徳をのこせり」とあり、定家編著書の一群に組み込まれていた。また定家自筆がのこる『近代秀歌』のなかには、「このごろの後学末生、まことにくたとのみ思ひて、そのさましらぬにや侍らむ<sup>4</sup>」と、『未来記』の序文にまるで重なることきの文言がある。『近代秀歌』と呼応させて、『未来記』を定家作と信じさせる計らいともみなせる。そこで本稿では、真偽の著述論議は脇に置いて、近世期に

あつては、定家真正の戒めであることに疑念が抱かれなかったものとして進めてゆく。

もう一点、どうしても戸惑いを隠せないのは、「未来記」という書名と内容のギャップである。来るべき時代によりみ出される作のありようをしめすのではなく、過去にうたわれた和歌を悪見本として列挙するというのは、歌書としていかにも違和感がある。『和歌文学大辞典』には、この題号は「予言の書であることを意味する」と説明があるものの、予言めいた書きぶりとはほとんど認められない。むしろ、小峯和明氏のつぎのような見方のほうがしっくりいくのではあるまいか。

中世の未来記は、たんに未来のことを予測し予言するだけではない。むしろ過去の歴史や現在生起していることどもを、あえて未来という時空を設定することで鳥瞰的に概括しようとする。いいかえれば、未来の予言のかたちを借りて、歴史や現実を解説しようとする。(中略) その意味で、未来記は歴史叙述といえるのである。<sup>(5)</sup>

ここでの「未来記」は、直接的には「歌行詩」<sup>(6)</sup>について言われたものだが、和歌の「未来記」を含みつつ、いわば「未来記物」と目される全体を概括して位置付けされたものである。見た目には予言の書でありつつ、じつは過去の事象への論評を意

図したものであるという指摘は、伝定家著の『未来記』にもびつたり合致する。単純化してしまうと、二百年前にさかのぼって、そこから百年後を見通せたと言ってみれば、その時点では「未来」を語ったことになるという理屈である。とはいうものの、二百年後の「現在」から見ると、百年前の既知の出来事にほかならない。身の置き所によつて、過去にも未来にもなるという都合のよい付会である。「未来記」を称するテキストが、いずれもそうした時間概念の操作によつて成り立っているというわけである。和歌の「未来記」も、過去に詠じられた和歌をまるで未来にやんだことにして、これからこんな歌を作ったらだめですよ、と警告を発した書といふことができる。

さて、鎌倉初期の定家のもととされる「未来記」が、室町期から近世期にかけて、どのように受け止められ、伝えられていったか、掻い撫でながら一見しておく。まずは和歌の世界でみると、正徹の『清巖茶話』(『正徹物語』下巻)には、「歌に秀句が大事也。定家の未来記、秀句の事をいひたる也」とある。素純の『かりねのすさみ』では、「一向あしきすぢにて、不<sup>ル</sup>可<sup>レ</sup>カ<sup>ラ</sup>用<sup>ル</sup>歌の様は何れぞや」という問いかけにたいして、それは定家の「未来記五十首」と「雨中吟十七首」であると答えている。また、桃山期に書かれた三条西実枝の『初学一葉』にも、「未来

記」中の歌を取り上げて論じられている。

さらに近世期に入ってから、この傾向は続いてゆく。中院通茂は『溪雲問答』において、「詠歌大概」「百人一首」は定家撰の秀逸歌集であり、「未来記」「雨中吟」は「あしき手本」であると指摘している。あるいは、武者小路実陰の『初学考鑑』では、「雨中吟」と「未来記」を比較して、悪歌の度合いにまで論究している。その他にも、「未来記」に言及する歌論書はひきもまらないといつてよい。

さて、「未来記」は本来和歌の戒めとして作られたものであるが、では和歌のいわば支流ともいえる連歌や俳諧において、どのように受け止められ、あるいは咀嚼されていったのだろうか。とりあえず、連歌論のなかでの議論をみておこう。

心敬の『ささめごと』を見ると、こんな一節が目につれる。まず、「歌には、未来記とて嫌ひ侍る体あり。連歌には苦しからざる事や哉」という疑問が投げかけられる。質問者は、句会のたびにそう疑われる句があつて、「恐るべきこと」だったというのである。そして、「ふかで世に天がしたがへ花の風」と「ほととぎす鳴かずは秋の月夜哉」の二句をあげて、「これらの類、未来記の最一なるべし。いかばかりも慎み侍るべしと也」と答えている。<sup>(7)</sup>前者は「天が下」が「したがへ」にかかつてゆく修辭、

後者は「秋の月夜」が、上からは「飽きる」の意をよみかけ、それが下の「月夜」にかかるという表現、これらいずれも無理な掛詞（秀句）として問題になるというのだ。<sup>(8)</sup>これ以上の詳説に踏み込んでいないのが惜しまれるが、基本的には和歌の未来記論の延長線上にある見解とみてよいだろう。

さらに本格的に論じようとしているのが、宗祇の『吾妻問答』である。これも「連歌にも未来記と申す事侍るやらん」という質問を掲げて、以下返答にかかる。はじめに定家の未来記にふれたうえで、「連歌には必ずさやうに書き置きたる物なし」と、連歌独自の未来記論はないと言いつつ、それでも連歌でも未来記に戒める「秀句」の邪路に入る者が少なからずあるとのべる。そこで、以後の文章を掲げてみる。

未来記の中に二種侍るべし。一には心の未来記、二には詞の未来記なるべし。詞の未来記とは、大略秀句の悪しきなり。心の未来記には、

仏なき世になど生るらん と云ふ句に、

<sup>あまのよ</sup>二月の末野の雉子巢にふして

「仏なき世になど生るらん」と云ふ心を案ずるに、人間の事なるべし。何ぞ鳥けだ物の事を可キ申ス哉や。尤も未来記に候。さやうの修行の事、大切に候。



未来記といっても二種類あつて、掛詞のような秀句表現にかかわるばあいと、前句の意味を取り損ねたような付句のよみぶりをいうばあいがあるとする。議論を精密にしようという意図がみられるが、それも和歌の笠の下にあつての話ということが出来る。

さてここまで、和歌および連歌における未来記をみてきたのだが、先述にもあるように、もとより「未来記」の語や理屈はもつと多岐・広範囲に及ぶものである。それらを概観したうえで、俳諧にかかわる話へと進むこととする。

寛永二十一年の貞徳『天水抄』には、まず師匠からの伝授が必要だとする六点の書物のなかに、「詠歌大概」や「百人一首」などとともに、「未来記」が挙げられている。さらに、つぎのようない節が認められる。

此道（和歌）は、もろこしよりも渡らず、人丸の御心を貫之請<sup>うけ</sup>つぎ、貫之の御心を定家卿覚知し給て、其御子孫に伝へ、末代迄の亀鏡に備へ、此風をたがへさせじと思召事、未来記にてしるべし。

そして定家の末流たる二条家流を受け継いで、この心得が世の中に広まるように、歌人たるものは心しなければならぬとする。俳諧の論書とはいえ、説いている要諦は和歌の論と違い

はない。

『未来記』という書は、写本にしても版本にしても、単独であるよりも、「雨中吟」と一体になっていることが常である。先述のごとく、『国書総目録』にも「未来記雨中吟」の項目のもとに、あまたの蔵書がしめされている。これまで度たび利用してきた関大本『和歌未来記』にも、この題簽のもとに、「未来記」に続けて「雨中吟」が収まっている。その冒頭には、「此十七首（雨中吟のこと）、未来記同前には侍れど、別に此名を雨中吟と号する事、尤可<sup>もつと</sup>有<sup>レ</sup>其得<sup>そのとく</sup>」とあつて、未来記と同様の内容をもっているとする。「未来記」では五十首の悪例和歌だったのが、「雨中吟」ではそれが十七首となっている。

その十七という数の謂われについても、説明が添えられている。

返々哥は風躰のあしきを嫌事<sup>きらふ</sup>也。数を十七首に定めらるゝ事は、太子の十七ヶ条の御憲法をかたどる義也。

学べべからざる見本としてリストアップされた和歌が十七という数であった理由は、十七条の憲法を模したものだということである。跡付けの数合わせのきらいも感じられないではないが、ともかくそうと受け止めておこう。そのうえで、聖徳太子になぞらえて、べつの「未来記」がしきりに言いたてられることが



あった。

それが〈聖徳太子未来記〉と称されるものである。ただし、それはさまざまな形態があつて、内容も一定しないものだといえる。小峯和明氏の『中世日本の預言書』（二〇〇七年、岩波新書、八頁）によると、つぎのようなこととなる。

〈聖徳太子未来記〉は、名称は同じでも文書であつたり碑文であつたり、ものによつてまったく姿かたちが異なる。内容も多種多彩で一定しない。〈聖徳太子未来記〉は聖徳太子に擬せられた予言をさす普通名詞とみなすべきものである。

このようなしろものであつても、「あちこちから出現し、時代社会をつらぬく未来記として君臨する」とも語られる（同書）。「未来記」として言挙げされるものが、書物や書写の体裁をとらないかたちで、とくに中世期の日本に広まり、ゆき渡つていたことを明らかにしようとするものである。

その極めつけが、「野馬台詩」ということになる。そもそも「野馬台詩」とは、「吉備真備が入唐した時に解説したという字謎の詩の題名」（日本国語大辞典「やばたいの詩」）で、日本の神仙に祈ったところ、現れた蜘蛛に助けられて、全首を読み解いたという逸話のもとになった漢詩である。全体は五言二十四句からなる長詩になっている。詩は宝誌和尚という中国・梁の

僧の手になるとされるものの、実体は鎌倉期に日本人の手によつて作られたものなのだという。すなわち、これもまた仮託の作ということになる。いずれにせよ、「野馬台詩」が未来記に相応するものとして、鎌倉から室町の中世期をかけて、大きな影響力をもつて浸透することになる。詩全体としては、君臣相和する平和な世の中が突如乱世となり、覇権争いが絶えることなく、ついには戦乱が蔓延して世界の崩壊を迎えるというものである。抽象的にみれば、時代や国・地域を問わず、いかにもありうる世界の変転であり、世情の変化ということになるが、それを具体的な歴史に合致させるとなると、とたんに殺伐たる露骨な事態が踏み込んでくる。

先にもふれた「歌行詩」系の注釈書には、「過去の歴史をふりかえり、個々の詩の文言になぞらえて概括するものが大半である<sup>9)</sup>」とされる。そして対象になる時代は神話から応仁の乱の世にまで至り、具体的には、神武天皇東征、大化の改新、道鏡事件、将門の乱、源平の乱といった時代の転換点となる事件が話題に供される。吉備真備の生きた奈良時代に、これだけ時代に幅のある数々の事柄を見とおして、予言を立てたとすると、文字どおり「未来記」ということになる。しかしじつはこれも、ずっと後世にあつて、あたかも予言が実現したかのようなフリ

をしているということになる。しかも、夢広がる薔薇色の将来ではなく、殺伐たる世の中、危機的乱世を描いてみせる。過去の事態を未来の出来事に見せかけるところに、和歌の「未来記」と一脈通じるところがあるということができる。

こうした括弧つきの預言書たる「未来記」の数々が、鎌倉から室町にかけての中世期に蔓延し、影響力を誇った。その勢いが近世に入るとどうなるか。その様相をうかがうというのが本章のテーマであり、そのなかで、和歌・連歌の流れを汲む俳諧において考えてゆくこととする。俳諧という文芸は、和歌文学の支流に位置すると同時に、江戸という新時代を表象するものでもあったことが鍵になるだろう。

### 三 蕉門の「未来記」

法華本門の心を

雨露は有漏の恵ぞもとの花の雨

車輪下  
非人

「麻よもぎ」といふ句を結縁に申つかはしたれば、我母の追善として此句を送りける也。翁当歳旦に、「こもを着て誰人います花の春」と聞えしも、未来記なるべし。

其角編『花摘』（元禄三年七月刊）の六月十日の条に見られる記事である。「雨露」は文字どおり雨と露であるとともに、万物をうるおす恵みのしずくを言わんとする。また「有漏」は、煩惱ある身のことである。全体は、煩惱多きわが身に恵みとなつてしたたり落ちる雨露は、もともと春の花をみごとに咲かせる雨なのですよ、といった句意か。前書の「法華本門」は、法華經二十八品の後半の十四品のことで、釈迦の絶対性を明示する心をあらわすとする。

これを四民に数えられず、蔑視された階層の者がよんで投じてきたことも珍しいが、さらにそれを「非人」の句として掲載した其角のふんぎりにも注意する必要がある。左注の「麻よもぎ」とは、其角じしんの発句「あまざかる非人貴し麻蓬」のことで、『花摘』五月十日の条に見られる。その前書によると、三蔵という「かたいもの」（物貴い）が歌仙に点を願ひ出てきた。みずからの境涯を悲しむというその前書をみて、奥書に書きつけてやったのが、「あまざかる」の其角の句だった。おそらくその返礼に送られてきたのが、右の「花の雨」の句で、これも其角の母親への追善になるうかと思つて、よんで送ってきたものだということだった。ただし、歌仙返句のちょうど一ヶ月後というのに意味があるのかどうかは不明である。

さて、ここでさらに注目されるのが、左注末尾の芭蕉への言及である。「こもを着て」の句は、まさにその年の芭蕉歳旦句であつた。嵐雪編『其袋』（元禄三年六月序）には、「都ちかき所にとしをとりて」という前書とともに入集する。薦を身にまとつた人物とは、乞食のことにほかならない。これは、高貴の人物が乞食姿に身をやつすという、『撰集抄』所収の話柄になぞらえた発想であることを、芭蕉みづから語っている<sup>11</sup>。

問題は、それを「未来記なるべし」と評していることである。すなわち、其角と三蔵の俳諧のやりとりを、芭蕉は京に居ながら、半年も前からまるで予言していたかのようにではないかというのだ。じつはこの歳旦句については、正月早々薦かぶりをよむなどんでもないと京の俳人たちが非難しきりだったと芭蕉じしんが報告、そしてなにもわかっていないと慨嘆している。それと知ってかどうかは不明ながら、其角は風雅を解する乞食との応答を句集に掲げて、わが師芭蕉はお見通しだったかのようだと試みてみせた。加生（凡兆）に宛てた手紙（元禄三年春）のなかで、其角は「季吟は公方様の御点者、私は乞食の師となり候」とのべて、皮肉まじりに満足ぶりを誇つてみせた。

ここにいう「未来記」は、将来のすばらしい風流を予言したもの、という意味で使われている。これまでみてきた語法と

異なる、というか、むしろ正反対といわざるをえない。芭蕉翁は半年後の出来ごとを予想して、みごとに当たりましたねと、賞賛したのが其角の文意である。後世、末代の衰微や悪句をあらかじめ予想して、批判するというのではまったくくない。未来とはむしろ、新境地の予言、ないし開拓へ向かうものとするかのようである。

では、従来の未来記の意味は忘れられ、まったく変質してしまったのだろうか。其角は、『雑談集』（元禄五年刊）にも「未来記」にふれたこんな一節を記述している。

元日や何にたとへん朝ぼらけ

忠知

「双六な世のさいたんやあふ目出た」など、聞もうとましき堀句する世には、「何にたとへん」と思ひ定めし死活サカイの境、未来記也。

「堀句」とは、「趣向をこらした難解な句」（日本国語大辞典）とされる。用例がほとんど見当たらないので確定はしづらいが、「聞もうとましき」という修飾句と併せて、従前の未来記に近い意味と解してよいだろう。論評される「元日や」の句づくりでは、沙弥満誓の「世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白波」（拾遺和歌集）から、二句をまるまる取ってきている。和歌の「未来記」に悪歌の典型とされる句法そのままでは

ないか。まぎれもなく、「未来記」の悪見本の句法といつてよい。それは其角も認めたうえで、しかし最近の「双六な世のさいたんやあふ目出た」などという、笑止千万の「うとましき堀句」に比べると、元日に当たって、今年一年の苦しさを何に喩えられようかという、生きるか死ぬかの心境をうたったところは、これこそ未来記というものだ、ということになるだろう。これまでの「未来記」の概念をふまえつつ、今後の生きざまを見とおすという気概がこもっている点で、「未来記」の新境地を提示しているかにもみえる。ことに、忠知が辞世句をのこして、切腹して果てた人物であったことを直前に紹介していることからすると、やはり人生をかけた重い句であったことをふまえたうえで其角評だったといえる。

其角が「未来記」に取り組んだ仕事はほかにもあった。治天編『横平楽』（享保二年序）には、師の許六から譲渡された品々が掲示されている。そのなかに、「猿蓑文集の下書洛去来の筆 一冊」として、「是はさるみの撰らるゝ時、文章共加入すべきに極り候得共、其角が未来記、尚白が送<sup>ル</sup>越人<sup>ヲ</sup>一序、文章あしきによりむなく止<sup>ム</sup>になる」という一節が見られる。当初の計画にあった「猿蓑文集」のために、其角はなんと「未来記」と題する文章を書いていたというのだ。しかし結局、「猿蓑文

集」が計画倒れに終わったことは周知のことである。とはいえ、其角の当の文章はすでに出来上がっていたとみられる。

さらに気になるのは、そのあとにくる、「其後先生、本朝文選編集の時、去来より来たる所也」という記述である。許六が『本朝文選』を編集するというので、其角らの文章が去来から送付されてきたというのだ。ただ残念ながら、現『本朝文選』をひもといても、それらを目にすることはできない。事情はわからないが、はずされたものとみられる。ちなみに其角は、「猿蓑序」と「嘲仏骨表」の二篇が掲載されるが、尚白の作は一点も取られていない。

『横平楽』に伝える話が事実だとすると、其角は未来記ということにかなり入れ込んでいたものと想像される。また明和二年（一七六五）刊の『俳諧未来記』という書には、「未来記」と題する、芭蕉・嵐雪・其角の三吟歌仙が紹介されている。しかもその歌仙は其角自筆だったと序文に報じられる。その附言には、「未来記の文はひめおかるゝ封印あれば、これを写す事あたはず」とある。あるいは、その秘密とされる未来記こそ、幻の其角「未来記」ではなかったかとも想像されてくる。となると、よほど未来記に関心をもっていたか思い測られる。

蕉門において、未来記に関心を抱いたのは、其角ひとりでは

なかった。許六は俳論『篇突』（元禄十一年刊）のなかで、「未来の句」という言い方で論じている。未来の句をよむのは、未熟な者には途方もないことのように思われるが、眼前のことをよめばそれで叶うのだと説く。そして上手の手合いは、今日認められなくとも、四、五年もすれば世間に広まって当たり前になるものだともいう。これも常識的な「未来」のとらえ方である。

さらに、こんどは芭蕉の発言をも紹介している。

師ひそかに「未来記」の一言あり。「吾滅後、門葉の友がら、集を作る事は、さだめて初心の手にわたるべし。見よく、十年は過すべからず」といへり。今我わがくが集作るの罪、未来記の中の一言、いとはづかし。

芭蕉みずから「未来記」の語を口にすることがあったという。しかも、ここにいる未来記は、芭蕉が将来の趨勢をよく見通しておられた、という意図で用いられている。旧態依然たる古参の連中では十年もたないが、新進気鋭の初学者に新規の集を任せると、その先を行くことになるという。そうした予言を「芭蕉の未来記」というのである。ここでも、中世以来語られ続けた「未来記」とは、まったくべつの意味を語っている。しかも、芭蕉じしんの発言だったというのだ。

また、「おと、ひはあの山こえつ花ざかり」という去来の句をめぐって、芭蕉はこんな見解を表明していた。『旅寝論』の周知の一話である

「此句今はとる人も有まじ。猶二、三年はやかるべし」と也。其後よしの行脚の帰かへりに立より給ひて、「日ひく汝びがへあの山越えつ花盛」の句を吟行し侍りぬ」と語り給ふ。又深川に発句共を捧げる内に、「世上に未まだ無情の句、一句もみえず。汝手がらたるべし」と。かくのごとく、未来の句を賞し給ふは、自他の上に聞侍れ共、未来の句をとがめ給ふ事終に聞かず。

本句は貞享五年（元禄元年）作とされている（『去来先生全集』）。その年三月、芭蕉は花の吉野山を旅した（『笈の小文』）。そのときこの句を口ずさみながら歩きめぐったよと、吉野からの帰路、京都の去来宅に立ち寄った際に、芭蕉みずから語ってくれたという。それ以前に、深川の芭蕉庵にまゐりて自作を届けたときから、無風情の句は一句もない、君の取り柄だと絶賛されたともいう（「無情」、天理・綿屋文庫本は「余情」）。

そしてこの句がはじめて目の目を見たのが、元禄三年の『花摘』においてだった。詠出時から三年が経過していた。芭蕉は当初、今すぐには世間に認められないだろうが、数年後に迎え

入れられるにちがいないと予言した、それがまさに『花摘』入集の時期に当たったことになる。その見通しを「未来の句」と言ってみせたのだ。さらに注目すべきは、「未来の句」というのは賞賛すべき作のことであり、咎めだての意味ではけっして用いていなかったという点である。「未来」の語は、もはや讃美のための用語になりおおせていたのだ。

それにしても、其角の『花摘』は、「未来」「未来記」との交叉が目立つ撰集だった。元禄三年がそういう年まわりだったのか、あるいは当の其角がキーパーソンだったのか。いずれにしろ、芭蕉と其角の気脈は、歩調を合わせて通じ合っていたかにもえる。前時代的未來記の概念が、もはや通じなくなっているともいうことができる。

未來記言説が意義をもちえた時代、それが中世であった。中世に生きた人々は未來記という枠組みから歴史のありようをつかみとろうとしていたのである。未來記が真摯な歴史や現実探究の効力を失った時、中世という時代は終焉するとみてよいだろう。

こう語る小峯氏の言（『野馬台詩』の謎 二二七頁）にのって言うならば、中世のそのあとの、近世という新たな時代の担い手として、まさに芭蕉やその門弟たちは新たな未來記の可能

性を模索していたということではないか。まったく同じことはがまるで正反対の方向性をしめすとは、よほど大きな時代精神の転位、新規の思潮の展開があったとみるべきだろう。では、その気運はいかにして育まれ、どのような新しい展開に道をつけようとしていたのか、最終章の課題へと進むこととする。

#### 四 「新しき未来」を求めて

数世紀に及んで凝固した感のある未來記の觀念に変化をもたらしただけものに、林鶯峰編『本朝一人一首』（寛文五年刊）があり、「野馬台詩」批判の急先鋒だったとされる（小峯氏先掲書）。卷之九には、偽作ならびに無名氏の作、また怪しい嘘くさい話が集められており、なんとその第三に「野馬台詩」が来ているのだ。全詩を掲げたうえで、これまでに積み上げられた読解の説を縷々並べ立てた挙句、「此等の謬説、（中略）以て世人を誤る。僅かに読書の眼を具する者、一見して其の邪説を知るべきは、則ち多言を費して亦益無し」（新日本古典文学大系本の読み下しによる）と、きっぱりと断罪に処している。旧来の常識にとらわれないうで、批判の目ざしをもって前時代の作物を評価しようとする姿勢は、江戸時代になって徐々にもたげてくること

になる。その一端ということもできる。

さて、その『本朝一人一首』であるが、思いがけなくも、こんなところにも顔をだしてくる。『嵯峨日記』である。これは、元禄四年四月、芭蕉が嵯峨にある去来の別業落柿舎に滞在した十七日間の日記である。師芭蕉の逗留のために、去来はさまざまな設<sup>しつら</sup>いを準備していた。室内の修理から、文具の用意、さらに和漢にまたがる種々の書物。その書物群のなかには、白氏文集や源氏物語などとともに、『本朝一人一首』が含まれていたのだ。芭蕉が手にとって読んだか、さらには「野馬台詩」にも目を通したか、まったく不明ながら、かりに偽作とも断じられる本文を目にしたとなると、そこから本作の未来記的思考の変位を読みとつたとするの、まんざらありえない話ではない。

ところで先述のごとく、在洛中の芭蕉が、まるで京俳壇の輦<sup>輦</sup>をかうような詠みぶりをやってみせたのは、元禄三年の歳旦のことだった。「薦を着て誰います花のはる」では、薦被り(乞食姿)を正月早々から出すとは何事か、と洛中非難的となつたという。ただし、芭蕉が意表を突くような歳旦句を発表したのは、その年に限ったことではなかった。前々年の貞享五年には、元旦を寝過ごしたため、二日の詠み初めとして、「二日にもぬかりはせじな花の春」とした。元禄四年には、三が日を通

り越して、ようやく四日になって、「大津絵の筆のはじめは何仏」とよんでみせた。その後江戸に戻った元禄六年には、元旦によんだのはよいが、「年々や猿に着せる猿の面」と、一見季語不在の句をやってみせた。こうした句づくりを芭蕉みずから、「人同じ所<sup>としまり</sup>に止て、同じ処にとしゝ落人る事を悔ていひ給ひたる」と伝えている(『三冊子』)。まさにここにこそ、芭蕉が一年ごとにこれまでにない歳旦句を発表しつづけた思いが見てとれる。旧来の句境を脱して、これまでにない新境地をうち出すには新年がうつつつけである。そんな思いを込めたのだろうか、ときに批難を呼ぶことも厭うことなく、歳旦に新たな趣向を打ち出してみせたのであり、その意向を真つ当に受け止めたのが、江戸の其角だったということができる。

芭蕉のそんな考えを端的にいうならば、「新しみ」ということになる。

新しみは俳諧の花也。古きは花なくて、木立ものふりたる心地せらる。亡師つねに願ひに瘦給ふも、此新みの匂ひ也。その端を見知れる人を悦て、われも人も責られし所也。せめて流行せざれば新みなし。新みはつねにせむるがゆへに一步自然にす、む地より顕はる、也。

『三冊子』(赤冊子)に伝える証言である。芭蕉はつねに新し



みを求めて、身も瘦せる思いだった、新しみこそが、「俳諧の花」なのだからという。日ごろから意識して新しみを追求している、一歩ずつ前進するところからしぜん新しみが出てくるものだとする。

この言をまつまでもなく、「新しみ」が蕉門俳諧の中心的理念のひとつであるのはまちがいない。「俳諧は新敷趣<sup>あたらしも</sup>を専とす」(『去来抄』)や、「俳諧はあたらしみを以て命とす」(『菊の香』所収「贈其角先生書」)などと、去来もしばしば「新」の重要性を語っている。

むろん芭蕉の言及も、一再ならずにわたっている。句評にもらし、書簡にしたためることもあれば、先掲の『三冊子』や『去来抄』などのような言行録に、その発言が書きとめられることもあった。その時期も、晩年に限ったことではなく、芭蕉にとっては初期にあたる延宝期からすでに俳諧の新しさについてしばしば語っている。たとえば「常盤屋の句合」(延宝八年)を見ると、「見立新敷、感多し」(十九番)や「作新敷、見るに幽也」(跋)などと、賛辞として用いられている。また『初懐紙評註』(貞享四年)の句評でも、再三再四「新しさ」の観点を指標として用いている。

芭蕉だけでなく、門人たちも高い関心を寄せていた。土芳や

去来のほかにも、支考の『葛の松原』(元禄五年)や許六の『宇陀法師』(元禄十五年)などで、「新しみ」「新し」に関連する論述を繰り返していた。

この新しみを追求する心情とは、もちろん今までにない匂づくりを目ざし、斬新なる句境を開拓しようという思念にほかならない。ということとは、和歌の未来記のごとく、後世の衰微を予防するための戒めというのとはまったく異なる。じつは、未来記の議論においても、この「新しさ」ということが影を落としていた。再掲ながら、版本『和哥未来記』の序文に、「後生の輩、哥を詠ずる事、深き姿のたけ高く優にたゞしく、又あはれふかきさまを思ひねがはずして、たゞ新しくよみ出さんとする故に、や、もすれば入ほが(巧みにすぎる厭み)に事過」云々という文章がみられる。ここでは、新しみが、深き姿・長高し・優・あはれなどの反対語として扱われている。

また春の末尾には、つぎのような具体的用例をともなった記述がある。

春は北秋は南に飛鳥<sup>とふとり</sup>のあすかや弥生くれて行らん  
雁を其ま、によまずして、あたらしくせんといひたてたるも、中／＼をろかにや。「あすかや弥生」といへる移り、又いひおほせずや。

晩春の帰雁の景をよもうとして、新しさをあえて言いたため、かえって愚かしいことになっているのではないかと注意を促している。下の句の批判において、本作の落度は、無理に新しいよみようをみせようとしたところにあるという指摘である。

古抄系の評釈だけでなく、版本『三部抄増註』でも同様の難詰を拾いあげることができる。「あたらしきいはんとてあらぬ事をいへるなり」や、「あたらしき哥はとらぬにや」といった評言が、盛んに用いられる。それは「おもしろくせん」とか、「珍しくせんとする」などと同様に、ことさらに新鮮味を出そうとすると失敗に終わるという戒めであった。

ここに「新」に向き合う芭蕉ら蕉門の姿勢を併置してみると、まるで雪に墨ともいうべき対照性をしめしている。新しさを追いかけることによって和歌を台無しにするという「未来記」にたいして、絶えず新しみを求めて、現状打破をはかり、時代を抜きんでようとする芭蕉たちの姿勢は、別世界のものともいえる。とはいえ、俳諧はまさに和歌の流れを汲み、詠歌の技法を学びつつ発展していった文芸であつたはずである。にもかかわらず、新しさという点においては、こうした逆向きの状況を呈することとなった。芭蕉の考え方は、「新しさ」「新しみ」とは

何かを追い求めることで、新時代を象徴する文芸である俳諧を根本から問いただそうとする精神を明白にするものであつた。文学的に大局の視座でみるならば、古典的な未来記から大転換をはかり、逆テーゼを打ち出したとさえいえるのである。

しかしながら、芭蕉をはじめとする蕉門の試行は、いうほど生易しいものではなかった。『宇陀法師』のなかに、つぎのような一節が説かれている。

あたらしみと云事、末々の門人迄き、習ひて申侍れど、慥たしかに知たる人なし。「新敷」と云は趣向に有。「あたらしみ」と云は句作りに有。毎度あたらしき趣向は稀なる故、句作りにてあたらしみを付て云事也。大秘事なれど、末々たつの門人うろたへ侍る故に出し侍る。

「新しき」とは趣向（発想法か）のことで、「新しみ」とは句作り（句法・表現か）のことと、わけて認識しているかと問われると、たしかに自信が揺らいでくる。句ごとに——ことに連句において——新しい趣向などとても不可能なので、表現の新しみて十分だと言われても、容易に解しがたいのではないか。これが芭蕉じしんの考えだったかどうかはわからないが、許六の著述とあらば、それなりの重みを有していることは否定できない。

ではつぎの芭蕉発言はいかがだろうか。朱拙編『けふの昔』(元禄十二年)に伝えるものである。まず定家『詠歌大概』冒頭の「詞<sup>ハ</sup>、以<sup>テ</sup>旧<sup>ヲ</sup>可<sup>ク</sup>用<sup>フ</sup>、情<sup>ハ</sup>、以<sup>テ</sup>新<sup>シキヲ</sup>為<sup>ス</sup>先<sup>ト</sup>」<sup>13)</sup>という文言などをしめしたうえで、芭蕉は、「俳諧は平話のあたらしみを本意にして、あながち古人のことばをもちひず」とおっしゃったという。いわゆる俗談平話こそが、新しみのあるべき本義であると説いている。定家の、詞は新規を追い求めず、心情にこそ新味を打ち出すべきだというのは逆に、いわば言辞優先を主張しているのを見ると、やはり定家の言説にとらわれない芭蕉の考え方が明確にあったと評価できる。

さらにいえば、芭蕉は新しさだけを至上命題にしていたわけではなかった。『猿蓑』編集の際、其角の「この木戸や鎖のさ、れて冬の月」という句が、はじめ上五が「柴戸や」となっていた。ところが出版直前に誤りに気づき、急遽改刻しようとしたときの経緯が、芭蕉没後の元禄八年一月二十九日付の許六宛去来書簡に報じられている。編者のひとり凡兆が、わざわざ改めるほどのこともない句だと言ったのにたいして、芭蕉はこう反論したという。

「此木戸」の五文字は、只五文字の新きと謂のみならず、一句のさびしさ、おもしろさ、「柴の戸」に百陪<sup>ヒ</sup>したると覚え

られ候。

この論争の結果、現在みるように、「この木戸や」となったという周知の一話である。ここで注目すべきは、「此木戸」としたこと、たんに上五の表現が新しくなっただけでなく、それ以上に、一句の閑寂や興趣が百倍も増したと強調したところである。これによると、芭蕉はことばの新しさを至上のものとして追求めたのではなく、そのうえに立って、文学的興趣の高さ、ないし深さを重んじたとみることができる。

脈々と受け継がれた「未来記」の思念に大きな変位がもたらされただけでなく、江戸という時世になって、文学論としてまったく新たな時代にはいったといえるべきだろう。

### 【注】

- (1) 関大蔵本(911—201/E1)では「詠歌大概抄」と手書する題簽付きの帙に収められ、五冊目に「和哥未来記」とやはり手書された題簽が付される。五冊全体の叢書名は不詳。なお引用に際して、濁点や傍訓は適宜添えるものとする。
- (2) 川平ひとし「署名する定家、装われるテキスト」(『偽書』の生成(二〇〇三年、森話社刊))は、「直接には清輔『奥儀抄』「上式」に記された『前和歌得業生柿本貫躬撰』を転用

したものと思われる」とする。

(3) 『三部抄増註』では「さゝん暮る」。

(4) 日本古典文学大系『歌論集 能学論集』所収。

(5) 小峯和明『野馬台詩』の謎』(二〇〇三年、岩波書店刊) 一五五頁。

(6) 「歌行詩」とは、長恨歌・琵琶行・野馬台詩の三点セットの書をいう。小峯氏は、三作がセットになった詳しい経緯はわからないとする。

(7) 小学館・新編日本古典文学全集『連歌論集・能学論集・俳論集』によるテキスト。歌学大系本・古典文学大系本のテキストは小異があり、また例句にも別解がしめされる。

(8) 日本古典文学全集には別解が施されているが、その解ではどこが未来記なのか明示されていない。

(9) 小峯和明『野馬台詩』の謎』二〇頁。

(10) 『花摘』そのものが四周忌にあたる其角の母の追善のために思い立った句集とされる。

(11) 本句については、拙稿「芭蕉の歳旦——新たなる俳境への模索」(大阪俳文学研究会『俳文学報』48号)に掲出。以後の議論もそれと重複するところがある。

(12) 先掲拙稿「芭蕉の歳旦」参照。

(13) 『詠歌大概』の本文は、「情以新為先、詞以旧可用」と前後逆になっている。

(ふじた しんいち／本学教授)